

天声人語

「親の死という事実が受け入れられない」「いずれ葬儀を出すつもりだった」。同居する親が亡くなつたことを隠し、年金を不正受給した疑いで逮捕された人々は、しばしば似た抗弁をする▼同じような事件が各地で起きた2年前のある日、映画監督の是枝裕和さん(55)は新作の着想を得た。捜査官や裁判官に容易にウソと見抜かれる言い訳にも何か深い事情がありはしないか。耳を傾けるべき「家族のつながり」があるのでないかと▼そんな視点で制作された映画「万引き家族」が、仏カンヌ映画祭で最も権威のあるパルムドールに輝いた。樹木希林さん演じる「おばあちゃん」の年金に頼つて暮らす3世代6人の物語である▼作品の舞台は東京の下町に立つ狭くて古い平屋。ゴミ屋敷のように散らかり、床の汚れは来客が座るのをためらうほど。それなのに家族は和氣あいあいと食事し、寄り添つて眠る▼暮らしは厳しいながらも、いたわり合つて暮らす。血縁を超えた家族のあり方を描く手法は鮮やかである。日本は裕福だという固定したイメージを持つ海外の人々を驚かせたにちがいない▼カンヌ映画祭と言えば、邦画では「地獄門」や「影武者」「櫻山節考」など時代劇の名作が頭に浮かぶ。失業や児童虐待、風俗労働など現代の世相に迫った是枝作品は、どんな日本像を世界に運んでくれるのだろうか。